

巻頭言

飛鳥の謎

会長 渡辺豊和

レイラインというのがある。

古代ローマ人がヨーロッパの各地に残した建築は実は一直線に配列されていて、建築のあるところから例外なく泉が湧く。レイラインの長さは一〇〇キロメートルに及ぶこともある。ヨーロッパがキリスト教の時代、すなわち中世になつてからはローマ建築は壊され教会に建て変わった。

このことを知ってフランスのゴシック名作をみると、天上の神、その摩訶不思議が実感できる。私は

キリスト教徒、クリシタンではないからレイラインとゴシック建築の不思議の方が天上の神よりずっと理解し易い。

巨石に興味を抱いたきっかけはフランス・ヒッチング『謎の巨石文明』を読んだことであり、特にレイ・ラインの叙述が面白かった。右記は現在記憶していることなので叙述がこのとおりではないはずだ。ともかくゴシック会堂がレイ・ライン上に並ぶというのは鮮烈だった。それと、ゴシック会堂の前にはローマ時代の建築があり、それ以前はストーンサークルなどの巨石構築物だったというのにも

感銘を受けた。

洋の東西を問わず、古代というのか、超古代からの聖地に宗教建築が建造されるという、当たり前と云ったら当たり前のことがわかったのだ。日本でも寺院は神社を壊して建てるか、同一敷地に並列し建てられ、神社はイワクラを御神体にするものが圧倒的に多い。ということは現在では寺院だけと云っているがそれ以前は神社だったのであり、さらに以前はイワクラだったのだ。

ヒッチングによればイギリスでもレイライン上にストーンヘンジやストーンサークルなどの巨石遺構がのっているという。しかもレイラインはそのまま水脈でもあるから巨石遺構は水が湧きでる泉を伴しているともいう。イギリスだけではない、これも全世界共通である。

ただし巨石遺構があっても現在は水脈が枯れ泉がなくなっていることはよくあるに違いない。

いずれにしてもレイライン、巨石、水脈、泉、不思議な地力といったものは古人には極日常的なものととして認識されていた。先日飛鳥にいったがこのとき書いた小文である。

『明日香が何故飛鳥なのか。何かで読んだことがあるが忘れてしまった。「あすか」の枕詞ではある。実はこの「あすか」とはトルコ語か西アジア語の可能性が高い。

飛鳥は聖徳太子時代の大和王朝の都だがこれをつくったのは蘇我氏だ。蘇我氏はバイカル湖南岸に居住していたトルコ民族で騎馬民族でもあり、五世紀前半に北海道から北東北に渡来し、南下、飛鳥に王朝を開いた。蘇我氏はゾロアスター教信徒でもあり、飛鳥をゾロアスター教の聖都として造営をした。どうしてそれがわかるのか。真北から二〇度西に傾く方向がゾロアスター教の聖方位のだが、飛鳥の都市軸がこの聖方位を示しているのだ。それと益田の岩船が聖山

耳成山々頂に向かつてこの聖方位と対称の方向を示す。日本ではこれもゾロアスター教の聖方位なのだ。飛鳥の旧道も真北から20度西に傾くし、斑鳩から飛鳥に向かう有名な太子道もそうだ。考古学者は気づいていないが発掘されればされるほどこの都市はペルシア都市とそっくりなことが明るみになってきた。二面石などまさにゾロアスター神を象徴している。善の勝利をとく。また猿石など滑稽な造形の石像はペルシア庭園にはよくみられるものだ。これだけでも古代ペルシアの影響で飛鳥はできた都市とわかる。

再度いう、飛鳥京の主軸はゾロアスター教の聖方位だ。だから飛鳥にある諸遺跡はすべてゾロアスター教遺跡であり、日本の巨石は飛鳥時代に大きな変化が起きた可能性が高い。』

然レイラインである。ただしシリウスと関わるもつと宇宙的な地球線ではある。柳原が調べてくれたところ益田の岩船を起点にして聖方位線上に、北へ、春日神社、鳥坂神社、八幡神社、川俣神社があるというのだ。

飛鳥時代にゾロアスター教の祭祀を担ったのは秦氏だ（拙著『扶桑国王蘇我一族の真実』新人物往来社）。これを念頭に右記の四神社を調べてみる。春日神社は藤原氏のものだから関係なし、八幡神社は秦氏の氏神。これは問題ない。鳥坂神社はかつて天照大神社といったという。天照大神はもともと男神、ゾロアスター教の太陽神、アフラマズダであり、伊勢神宮はかつては秦氏の神社だった（拙著『バロック王の織田信長』悠書館）。川俣神社縁起は伏見稻荷神社と瓜二つの起源神話だ。伏見神社をつくったのは秦氏。だから鳥坂、川俣両社とも秦氏が関係する。

秦氏が祭祀する神は八幡、天照大神、稻荷神の三神であり、益田の岩船とこの三神がゾロアスター教聖方位で結ばれていたというのだからこの発見は大きい。

というのも松本清張説が俄然真実味を帯びてくるからだ。清張は益田の岩船をゾロアスター教の拝火壇と想定した。古代ペルシア、アケメネス朝の摩崖王墓が並ぶナクシェ、イ、ルスタムにある拝火壇の基盤石と酷似しているからだ。

ただし益田の岩船の方が圧倒的に巨大だ。二本の拝火柱が並んで発つことになるが柱の高さは一〇メートル近くあったと思われる。それで清張はこれを当時の人々は塔といったに違いなく、齋明天皇がつくった塔はこれのことだと明言している。ただし清張も最晩年になつてくると学者たちの批判に疲れたのか、自説に自信をなくしていった。

齋明天皇はゾロアスター教を信奉したのは間違いない（拙著『扶桑国王』）。やはり齋明天皇は巨大な拝火壇というか、拝火塔をついていたのだ。ただし現在益田の岩船はゾロアスター教聖方位とは真北を挟んで対称角度、真北から二〇度東に傾いた方を向いている。これも日本ではゾロアスター教の聖方位とされた。さらにその方向に耳成山々頂がくることもあり、何時の頃に誰かが本来の聖方位から対称の向きに変えてしまったのであろう。

ともあれ益田の岩船も含め飛鳥巨石は深い謎を秘めている。

了